



Title	金融城下町の秋
Author(s)	濱田, 康行; Hamada, Yasuyuki
Description	『信用組合』第52巻第11号の巻頭言。著者のウェブサイトでも公開されている。 http://www.econ.hokudai.ac.jp/%7Ehamada/articles.html
Citation	信用組合, 52(11), 2-3
Issue Date	2005-11
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/761
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	article
File Information	hamada_shinkumi_52(11)_2-3.pdf



金融城下町の秋

自由人

最近マスコミによく登場する新興企業の社長さん達を見ていると、ずいぶん自由だなと思う。言いたい事を言い、やりたい事をやっている印象で、万事堅苦しい金融マンから見ると理解できない面が残るものの、なんとなく羨ましい。

どうして、ああいう行動が取れるのだろうか。もちろん本人のキャラクターもあるのだけど、やはり彼らの属する産業が規制緩和という潮流の中で出現したからだと思う。これをやってはいけない、あれもやってはいけないという規制世界ではなく、たいがいの事はやってよい産業に最初から育ったからだ。

そこへいくと金融業は、サラ金業界などを除けば、依然としてがんじがらめだ。もちろん規制緩和は当業界でも進展したはずだが、一向にホリエモンの自由を享受する雰囲気がない。確かに、銀行で投資信託を売ったり、逆に証券会社が銀行をやろうとしたりで、業界の垣根は自由に超えられるが、対監督官庁ということになるとさっぱりようだ。

親離れ？

理由のひとつは法律だ。ホリエモンさんや村上さんの行動を規制できそうなのは商法、せいぜい証取法だ。しかし、商法などは大きすぎてそれを所管する官庁などは存在しない。ところが、金融機関には銀行法、信金法、協金法等、各業態にそれぞれ法律があり、それを所管する官庁の部局がある。これらの官庁がいわば城主となって城下の住民は長い間、守られてきたのは事実だ。しかし子供が大人になる時がいつか来るように、いつかは保護の手を離れる。実は、殿様離れの時はとっくに来ているように思えるのだが、最近では逆に、“いや、まだ大人になってない”という殿の声が聞こえてくる。それは、リレバン狂想曲に乗って聞こえてくる。

リレバンのお告げ

規制は、規制する必要がなくなってもなくなる。それがなくなるのは規制をする人がいなくなった時である。これは相当程度、日本の真実なのだ。規制はその対象がなくなってしまうと、対象を移動させて生き延びようとすることもある。

大手の金融機関はずいぶん監督当局の世話になった。中小金融機関も同じようなものという意見もあろうが、金額で見たら大手のその比ではない。北海道拓殖銀行に4兆円、日本長期信用銀行に5兆円、そして金融安定の題目で資本金としてつぎ込まれた資金は10兆円以上だ。しかし、危機は去ったかに見える

る。今年に入って大手金融機関の決算は史上最高で、ついに注入資本金の返済が本格的に始まる。法律に基づく監督は続くが、借金を返せば経営の自律性は取り戻せる。そうなったら金融城下町から引っ越せるかもしれない。しかし、お城の殿様は少し淋しいに違いない。というのは天守閣を中心にこのところ増築を重ね、城で働く人員も築城時の4倍にもなっているからだ(来年もまた190人も増員する)。

市内の見回りを頻繁にやる必要があるというのが増員理由だが、大柄な住人は殿様に借金を返してさっさと移転するつもりだ。これに庶民が続くことになったら城下町はガラガラになる。そうはさせじと告文が貼り出されるが、これにどういう訳か、リレーションシップバンキングの奨励と書いてある。

ずっと前からやってるよ、と言っても殿は聞いてくれない。布告をどう実行するか計画をそれぞれ提出しなさい。2年前のように人の答案を見るようなことはダメ。選択と集中とやらで独自色を出しなさいというのだ。これには庶民も大弱りだ。

確かに、地方の金融機関には預貸率の極端に低いものがある。金融機関にも、それを問題だと思っているところもある。地域にもっと資金を供給しようと考えている。だから、こんな時、一方で不良債権を増やさず、他で貸出を増やす方法があったら嬉しいとも思う。その方法が殿の言葉で示された。それはリレバンじゃ。

半信半疑

しかし、どうかなと庶民は思う。こう書けと言われているから計画にはリレバン推進と書くけど、事は半信半疑だ。地方経済の沈滞は続いている。その活性化のために地域の金融機関が果たす役割はあるにはある。しかし、金融機関は元来、受け身である。地方経済の復活は、実業界、産業界が中心になりそれに官庁が協力して進めるのが筋。金融機関はそれを後押しする立場だ。将棋盤の金と同様、金融機関は地域経済の守り駒なのだ。このあたりをもう少し理解して、あまり地域再生とか創業支援とか、はたまたベンチャー支援とかの格好の良いスローガンを吹聴しないよう、殿様にお願いできないものか。大手機関はグローバリズムとかでどこにもいけるけど、私達地域金融機関はその名の通りよそに移る訳にはいかないのですよ。最後まで城下を守るのは私達なのだから、城下のことはもう少し私達に任せて、殿はお城の中の整理をなされたいかがかな。